

大好きな仕事に出会えた幸せ ～研究は臨床の幅を広げる～

三上万理子

横浜西口菅原皮膚科院長

皮膚科医の父、母、妹の4人の家庭で育ち、小学生から聖心女子学院に通学させてもらったことで奉仕の心を学ぶ機会を多く得ました。その影響もあり、小学6年生ごろには医師になると決めて走り続けてきた気がします。僻地医療に従事したく内科医として脂質異常症、糖尿病を学んでいましたが、皮膚科医になったいま、psoratic disease (PsD) として再び代謝学に関わるようになるとは、世の中に無駄な寄り道はないと感じています。

医師3年目に皮膚科医に転向し、心から尊敬する石井則久先生に出会い、先生に導かれ世界への道が開かれていきました。石井先生は国際医療、皮膚感染症領域でご高名であり、2023年に国際皮膚科学連盟 (ILDS) の功労賞を受賞されました。先生のご指導のもと、私も国際医療、皮膚感染症 [メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症 (MRSA)、抗酸菌症]、 “ワンヘルスサイエンス” の研究を行うようになりました。ワンヘルスサイエンスとは人間と動物、生態系の健康を一体として捉える考え方であり、人獣共通感染症や薬剤耐性などに各領域の専門家が協力して取り組むものになります。WHOが定める “顧みられない熱帯病” には抗酸菌であるハンセン病と Buruli 潰瘍が含まれます。国内では希少疾患のため、アフリカ、インドネシア、フィリピンなど途上国での研究が必要となり、疫学調査、新規治療開拓、wound management、迅速診断キット・遠隔診療システム開発などで、琉球大学の先生方、国立感染症研究所の先生方、アメリカでご活躍の四津里英先生、名古屋大学の村瀬千晶先生とご一緒させていただきました。いろいろな国の保健省や医療従事者とグローバルに活動できたことは本当に貴重な経験でした。ハンセン病においては帝京大学臨床検査学科・鈴木幸一教授、MRSAにおいては東京薬科大学薬学部病原微生物学教室・中南秀将教授と偉大な基礎の先生にお世話になって参りました。基礎研究がこれほど臨床現場に生きてくるものなのだと研究を通して知ることができました。クリニックでの診療も本当に大好きで、前院長の父にみっちり指導してもらいました。最近ではアトピー性



皮膚炎関連の生物学的製剤の解析において広島大学の先生方とお仕事をさせていただき、光線療法においては名古屋市立大学の先生方にご指導いただき、そのノウハウを患者様のためにも大いに活かせるようになってきたと思います。感謝の気持ちでいっぱいです。

診療の傍ら毎年、科研費、大山財団、高木賞に申請を続けました。大山財団は年齢制限までの研究費獲得に至りませんでしたが、私が会頭をさせていただきました2023年の「第7回ワンヘルスサイエンス学会年次学術集会」では支援助成金を頂戴しました。科研費を7年かけて獲得し、高木賞、日本臨床皮膚科医会学術集会最優秀ポスター賞、神奈川県医師会学術功労賞もいただくことができました。ですが、研究で得られた何よりも大切なものは、多くの先生との縁です。研究に関わらせていただけることは、開業医としては本当に貴重な経験で、温かい指導者の方々に恵まれました。「恩返しは業績で！」と心に決め、また、「一発で決めろ！」との先述の鈴木ラボの教えに従い、原稿は可能な限り一生懸命執筆し、皮膚科のみならずあらゆる学会で発表をしてきました。毎日必死でしたが、本当に楽しい日々でしたし、今も続行中です。

母としてはシングルマザーでしたが、ありったけの愛を息子に注ぎ、完璧とはほど遠かったですが、背伸びをせず自然体のママでやってきました。息子は研究者を目指す某大学の海洋生命学科に入学し、ワンヘルスサイエンスに海洋学を通して貢献したいと頑張っており、母として幸せを感じています。

私の研究は開業後、40歳から始まりました。若い先生も子育てしながらでは大変だと思いますが、素晴らしい仕事との出会いがすぐそこにあるかもしれません。視野を広くチャンスを逃さず、“楽しく”頑張ってみてください。